"Legends of the Province House" における Hawthorne の時間の問題

倉　橋　洋　子

Hawthorne's Problem of Time in "Legends of the Province House"

Yoko Kurahashi

I

Nathaniel Hawthorne の "Legends of the Province House" は四つの物語，"Howe's Masquerade" (1838)，"Edward Randolph's Portrait" (1838)，"Lady Eleanore's Mantle" (1838)，"Old Esther Dudley" (1839) で構成されている。これらは当初 *United States Magazine and Democratic Reviews* に "Tales of the Province House" の I～IV として1838年から1839年の間に発表された。Hawthorne が，これらをシリーズとして発表したにもかかわらず，"Howe's Masquerade" は，シリーズのタイトルを付けられず1841年，*Boston Book* に掲載されたりした。Hawthorne は1841年，*Twice-Told Tales* 第二版の編集に当たり，*Boston Book* から "Howe's Masquerade" の原稿を入手し，1842年これら四つの物語に "Legends of the Province House" の副題を付けて，*Twice-Told Tales* の第二版に収録した。[1] それが，現在の型となっている。

Hawthorne のこのような意図にもかかわらず，Robert H. Fossum [2] によってシリーズの構成上の統一を認めた上での研究がなされるまで，そのような研究は本格的にはあまりされてこなかった。Fossum の後，Julian Smith,[3] Margaret V. Allen[4] 等が続き，最近では四つ

1 Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (Boston: G. K. Hall & Co., 1979), p. 161.

2 Robert H. Fossum, "Time and the Artist in 'Legends of the Province House'," *Nineteenth-Century Fiction*, XXI (March, 1967) Fossum は物語の中の過去と現在との関係を論じている。

3 Julian Smith, "Hawthorne's *Legends of the Province House*," *ibid.*, XXIV (June, 1969) Smith は四つの物語の時代の循環に視点を置き，アメリカの独立運動に対する Hawthorne の考えを論じている。

4 Margaret V. Allen, "Imagination and History in Hawthorne's 'Legends of the Province House'," *American Literature*, IV (November, 1971) Allen は物語における歴史，現在と過去の関係，事実と小説の関係を論じている。

の物語は一つの枠組の中に組込まれ，互いに関係付けられたシリーズであると，ほぼ定着してきている。

本稿においても，Hawthorne がこれら四つの物語をシリーズとして発表したことを重要視し，さらに下記に述べる内容，構成上の理由により，これらの物語を一つのまとまったシリーズであることを前提とする。具体的な理由として，物語は第一人称の聞き手が登場し，彼が旧総督官邸において物語を聞くという同じ形態を取るということ，各々の物語には，マサチューセッツ湾植民地におけるアメリカ独立運動という同じ背景があること，第一の物語 "Howe's Masquerade" に登場する人物は，第二，第三，第四の物語にも登場し，第一の物語がそれに続く物語の伏線の役割を果たしていること，等が考えられる。

以上のことを考慮し，物語における過去と現在との関係を，人物と語り手の点から検討し，その上で，Howthorne の過去と現在の意義を他の作品との比較，及び，19世紀アメリカの社会的背景の面から考察を加える。

II

"Legends of the Province House" の四つの物語は，旧総督官邸において語られる。1679年に建てられた官邸は，19世紀のボストンの賑やかな中心地から，わずかばかり離れた所に当時の面影を残して存在する。官邸の窓からは近代的な建物が見えると同時に，官邸の内部の古さからアメリカ独立戦争当時の様子が連想される。つまり，Fossum が指摘しているように，現在と過去とが官邸から見られる。[5] 即ち官邸は現在においても，なお過去と関わっていると考えられる。この官邸にまつわる四つの物語が，二人の語り手によって語られる。

四つの物語は，その枠組となっている官邸と同様に，現在と過去との関わりにおいて展開される。物語の中で描かれた現在と過去との関係を考察することから始める。

"Howe's Masquerade" において，マサチューセッツ州，イギリス軍総司令官 William Howe[6] は，イギリスの古い植民地制度の最後の国王任命の総督である。アメリカの独立運動が進み，まさに新しい制度と変わろうとしている時代にあって，彼は過去の制度の代表である。当時の社会的環境において，彼は過去を象徴していると考えられる。

Howe が過去を徴象しているならば，現在を象徴している人物は，Joliffe 大佐と彼の孫娘である。Joliffe 大佐は独立主義の人間で，アメリカの独立運動を肯定している。また彼の孫娘も，Howe の開いた仮装舞踏会に現われた，歴代の総督の仮装した者達に対して，次のように

5 Robert H. Fossum, *Hawthorne's Inviolable Circle: The Problem of Time* (Everett/Edwards, inc., 1973), p. 36.

6 T. S. Eliot が *The Little Review* (August, 1918) で，Hawthorne は大変正確な歴史観を持ち，アメリカの植民地史の小分野における彼の知識は広く，彼はそれをうまく利用していた，と指摘しているように，Howe は実在の人物で他にも歴史上の人物が登場する。

語り，アメリカの独立運動を肯定している。

> "Now, were I a rebel," said Miss Joliffe, half aloud, "I might fancy that the ghosts of these ancient governors had been summoned to form the funeral procession of royal authority in New Englacd."[7]

また Joliffe 大佐は Fossum が指摘しているように，[8] 過去の総督達との接触があり，過去の教訓を理解している。そのため，次のように未来を予言できる。

> The empire of Britain, in this ancient province, is at its last gasp to-night; —almost while I speak, it is a dead corpse; —and, methinks the shadows of the old governors are fit mourners at its funeral!
> (254)

Joliffe 大佐と，彼の是認者の孫娘は，過去をも理解している人物である。

結局，"Howe's Masquerade" において，象徴的な意味で，Howe が過去を，Joliffe 大佐と彼の孫娘が過去を認識した上での現在を表わしている。

"Edward Randolph's Portrait" において，過去の制度の代表は，"Howe's Masquerade" において，王党派の総督として既に登場している Thomas Hutchinson である。アメリカ独立戦争前のニューイングランド人民の不穏な動きを押えるために到着した，英国艦船に対してウイリアム砦の要塞と町の占拠の許可を，彼は下す。この許可に反対して，彼と対立する人物は，彼の姪の Alice Vane と，親戚のウイリアム砦の指揮官 Francis Lincoln および，古いピューリタンの創設者の代表であるボストンの行政委員である。Hutchinson と対立する彼等は，当時の社会的環境において，Hutchinson より民主主義的な考えを持ち現在を表わしていると考えられる。

彼等は，現在の状況ばかりでなく，過去から教訓をも学ぶ才知を持つ人物である。即ち，彼等は Edward Randolph の絵にまつわる伝説——Randolph は，官邸の創設者で，最初の植民地条令を破棄した自由の破壊者である。そのため彼は，人々に呪われた運命をたどった。——から教訓を学び，それを現在と将来に生かす能力を持つ人物である。彼等は，過去の教訓の上に成り立つ現在を表わしていると考えられる。

ところが，Hutchinson は過去の制度の代表であるにもかかわらず，過去の伝説を理解し，それから教訓を学ぶには，あまりにも現実的な人物で想像力に欠けている。彼は歴史的真実の

---

7 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1974), IX, 249. (以後 vol. IX からの引用は，引用文の後に頁数のみを示す。)

8 Fossum, "Time and the Artist in 'Legends of the Province House,'" p. 340.

ない伝説を，"These traditions are folly, to one who has proved, as I have, how little of historic truth lies at the bottom," (262) と語り，全く信用しない。このように想像力に欠ける Hutchinson は，Edward Randolph と同様の罪を犯すのである。

ところで，Edward Randolph の肖像画には，かつて，絹の黒い布が掛けてあったが，現在はその痕跡を留めるにすぎない。この黒いベールは，Hawthorne の "Minister's Black Veil" の Hooper 牧師の顔に掛けられた黒いベールを連想させる。牧師の黒いベールは罪を象徴しているが，それと同様に，人々に呪われるような罪を犯した Randolph の肖像画の黒いベールも彼の罪を象徴している，と考えられる。また，この肖像画は，Fossum も指摘しているように，*The House of The Seven Gables* の Pyncheon 大佐の肖像画をも連想させる。[9] Pyncheon 大佐の肖像画は，罪により呪われた過去を象徴している。

結局，Randolph の肖像画は，罪と罰により呪われた過去を象徴している。それと同様に Hutchinson も罪と罪により呪われた過去を象徴するようになると考えられる。

"Lady Eleanore's Mantle" において，Eleanore Rochcliffe は，ヨーロッパの古い貴族階級の代表である。彼女は，ヨーロッパからニューイングランドへ渡って来た，身分も財産もある人物である。彼女の高慢な貴族的性格は，彼女を慕いヨーロッパから来た Jervase Helwyse が彼女のために踏み台になる時の次の場面の描写で明らかである。

> and never, surely, was there an apter emblem of aristocracy and hereditary pride, trampling on human sympathies and the kindred of nature, than these two figures presnted at that moment. (276)

彼女と同様に，貴族階級を表わしている人物は，彼女の取巻のバージニアの大農園王，イギリスの士官の Longford 船長，イギリスの伯爵の孫の若い牧師と総督の秘書である。彼等は Eleanore の高慢な貴族的態度を讃美している。

彼等とは反対に貴族階級を非難するのは，民衆党の闘士であり，医師の Clarke である。彼は，まず初めに，Eleanore が到着した時に，葬式の鐘が鳴ったことに対する Longford 船長の咎に対して " a dead begger must have precedence of a living queen" (275) と反発する。次に，彼は，Eleanore が Helwyse を踏み台にしたことに対しても非難する。また，Clarke は Helwyse の Eleanore に対する崇拝も非難する。彼は，彼女の天然痘にもかかわらず会いに来た Helwyse に，次のように痛烈に言う。

> Wilt thou still worship the destroyer, and surround her image with fantasies the more magnificent, the more evil she has wrought? Thus man doth ever to his tyrants! (286)

---

9 *Ibid.*, p. 341.

Helwyse の崇拝ぶりは，暴君に対する無抵抗の人間のそれのようである。暴君であればある程，崇拝する人間の弱さを Clarke は非難している。結局，Clarke は民主主義の精神を表わしているのである。Eleanore が貴族階級，過去を表わしているとすれば，Clarke はそれに対して，民主主義，現在を表わしていると考えられる。

"Old Esther Dudley" において，朽ち果ててしまった過去を完全に象徴しているのは，Esther Dudley である。彼女の様子は，アメリカがイギリスから独立し，最後の総督の Howe が官邸を去る時の，彼女に対する次の印象の中に語られている。

> he deemed her well-fitted for such a charge, as being so perfect a representative of the decayed past—of an age gone by, with its manners, opinions, faith, and feelings, all fallen into oblivion or scorn—of what had once been a reality, but was now merely a vision of faded magnificence. (294)

Esther は，アメリカが共和国となった後も，現実を認識する能力を持たず，新しいアメリカを否定し，イギリス国王に忠誠を誓い，過去の非現実的な空想の中に生き続けている人物である。

彼女と対照的な人物は，新しく知事となった Hancock である。次に示すように，彼と彼の周囲の者達は，過去や現在に生きるのではなく未来に向かっている。

> And I, and these around me—we represent a new race of men, living no longer in the past, scarcely in the present—but projecting our lives forward into the future. Ceasing to model ourselves on ancestral supersitions, it is our faith and principle to press onward, onward! (301)

また，さらに，Esther の死に対する，次に示す彼の言葉は，過去に敬意を払いつつ，過去と訣別し前進をめざしていることを語っている。

> "We will follow her reverently to the tomb of her ancestors; and then, my fellow-citizens, onward—onward! We are no longer children of the Past!" (302)

Esther と Hancock との対立は，Michael David Bell が指摘しているように，*The House of the Seven Gables* において，現在に生き未来に向かう Holgrave と，過去に生きる Clifford との対立と類似している。[10]

---

10 Michael Davitt Bell, *Hawthorne and the Historical Romance of New England* (Princeton University Press, 1971), p. 223.

Ⅲ

"Legends of the Province House" の語り手は，途中から変わる。"Howe's Masquerade", "Edward Randolph's Portrait", "Lady Eleanore's Mantle" の語り手は，旧総督官邸，現在の居酒屋の常連である Bella Tiffany である。第四の物語の "Old Esther Dudley" の語り手は，第三の物語，"Lady Eleanore's Mantle" が語られる時から加わった高齢の王権支持者である。彼は Howe 将軍の時代に生存していた人物で，イギリス国王に忠誠を守り，植民地時代の制度と習慣を守り，民主主義には決して屈服しなかった貴族階級の出身で，現在もなお忠誠心を持っている。この語り手の変化と，物語の描き方との関係を検討する。

Bella Tiffany の語る "Howe's Masquerade" において過去を徴徴している Howe は，否定的に描かれている。まず第一に，彼の仮装舞踏会開催という行為は，次のように非難されている。

> it was the policy of Sir William Howe to hide the distress and danger of the period, and the desperate aspect of the siege, under an ostentation of festivity. (243)

彼の行為は，絶望的な状況を宴会という虚飾で隠そうとする，即ち，現実から逃避し，過去の栄光の陰に隠れようとするものである。

次に，仮装舞踏会中に次々と説明のされ得ない事件が起きる。[11] 最初の葬送行進曲は，イギリス国王の葬儀の時に聞かれた曲である。これは，イギリス国王のアメリカにおける権力の終焉を暗示している。次に現われる歴代の総督達の様子に歴史の詳価が表われている。つまり，ピューリタンの総督，即ち，昔のマサチューセッツの民主主義の指導者達の勝ち誇った様子は，民主主義を高く評価していると考えられる。また，王党派の総督達の怒り，悲しみ，苦悩に満ちた様子は，王領植民地制度を低く評価していると考えられる。さらに，Howe の仮装をした者の怒りと悲しみのうちに官邸を出て行く様子は，王領植民地制度の終わりを意味し，アメリカの独立と民主主義を肯定していると考えられる。

アメリカの独立と民主主義を支持する Joliffe 大佐と彼の孫娘は，すでに検討してきたように，過去を認識した上で現在に生き，かつ未来をも見通す能力のある人物であると，肯定的に描かれている。結局 "Howe's Masquerade" において，過去の象徴である王領植民地制度と Howe は否定的に描かれ，現在の象徴である民主主義と Joliffe 大佐と彼の孫娘は肯定的に描

---

11 "Edward Randolph's Portrait" においても説明のつかない事件が起きる。Jane Lundbald は *Nathaniel Hawthorne and European Literary Tradition* (Russell & Russel Inc., 1965) において，物語のゴシック的要素を追究している。

かれている。

"Edward Randolph's Portrait" においても，過去を象徴する Hutchinson は否定的に描かれている。彼は，ニューイングランドを愛する人々の反対にもかかわらず，ニューイングランドをイギリス軍の手に渡す。 Edward Randolph と同様に人々の自由を奪うような罪を犯す Hutchinson は，人々に呪われた運命をたどる。

彼と対立し，当時の社会的環境において現在を象徴している Alice Vane と Francis Lincoln および，ボストンの行政委員は，肯定的に描かれている。彼等は，すでにみてきたように，過去から教訓を学び，現在の状況判断を適格にする。特に Alice は，重要な役割を持たされていると考えられる。彼女はヨーロッパで絵の教育を受けたが，それにもかかわらず，ニューイングランデを愛する気持は失っていない。また彼女は青白く妖精のような雰囲気を漂よわせている。このような点において彼女は，Hawthorne の *The Scarlet Letter* の Pearl のイメージと重なる。Pearl の果たす役割の中には，"Even thus early had the child saved her from Satan's snare"[12] と述べられているように，Hester に再び罪を犯させないようにすることがある。Alice も Pearl と同様に，Hutchinson に Randolph のような罪を犯さないようにと忠告する。

> "Be warned, then!" whispered Alice. "He trampled on a people's rights. Behold his punishment—and avoid a crime like his!" (268)

このように彼女は，肯定的に，その上積極的に Hutchinson に働きかける重要な人物として描かれている。

"Lady Eleanore's Mantle" においても，過去の貴族階級の代表である Eleanore と彼女の取巻は，悲惨な運命をたどり否定的に描かれている。まず，彼女の性格は，物語の最初から高慢で手におえないと非難めいて描かれている。さらに，彼女の性格に対する非難は，官邸での舞踏会で Helwyse が次のように語りながらワインをすすめる場面で一層明らかになる。

> And this shall be a symbol that you have not sought to withdraw yourself from the chain of human sympathies—which whoso would shake off must keep company with fallen angels. (280)

彼女は彼のすすめを拒否する。これにより彼女は人間的な思いやりに欠けていることが示されている。また，この場面において，Helwyse を口々にののしる Eleanore の取巻も彼女と同様に，高慢で人間的な思いやりに欠けていると判断される。結局，彼等は高慢の罪を犯して

---

12 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1971), I, 117.

いるのである。このような貴族階級の Eleanore と彼女の取巻は，彼女のマントが発生源となり天然痘に一番にかかる。[13] これは，彼等に対する非難であり，罰であると考えられる。

彼等，貴族階級の高慢の罪と罰，Eleanore のマントとの関係について検討してみる。彼女のマントは美しく刺繍が施され豪華なもので，人々の噂によると異様な雅やかさを備え，彼女の象徴となっている。即ち，マントは彼女が代表している貴族階級とその高慢な性格の象徴，つまり高慢の罪の象徴であると考えられる。ところで，彼女の刺繍を施したマントは，*The Scarlet Letter* のAの文字を連想させる。Aの文字は Hester により刺繍を施された罪の印であり，罰として彼女が胸に付けたものである。Eleanore のマントが天然痘の発生源であることから，Jane Lundbald が指摘しているように，マントは，Aの文字と同様に，罰も象徴していると考えられる。[14]

次に罪と罰を象徴しているマントと，Eleanore の姿をした人形が，官邸の前で Helwyse と町の人々によって焼かれることについて検討する。Eleanore は貴族階級の代表であるが，一方 Helwyse は名もないロンドンの植民地代理人秘書で，平民の代表である。また町の人々も平民である。彼等は Eleanore が Helwyse を踏み台にした時，称賛の拍手を送った。しかし，天然痘の流行により，これまでの彼女に対する崇拝が失われた。また，Helwyse も Eleanore に病室で会った後，彼女から受けた屈辱の記憶がよみ返り，彼女に対する気持に変化が起った。彼等がマントと人形を焼くことは，彼等に貴族階級を否定する民主主義の精神が芽ばえ始めたと解釈できる。結局，このような物語の結末は，貴族階級，過去のヨーロッパ制度の否定を意味していると考えられる。

"Lady Eleanore's Mantle" の語り手は，これまでの Tiffany から，王権支持者に変わる。語り手の変化と共に，過去を象徴する Eleanore の描き方にも変化がみられる。彼女は否定的というりも，むしろ同情的に描かれている。

まず，町の人々は正気を逸した彼女に対して，好意的である。特に子供達は，彼女の理解者である。彼女が子供達に昔の話を聞かせると，彼等は彼女と同じ過去の世界へ這入込む。それは，子供特有の空想によるものであろうが，彼女の過去に対する信頼の純粋さによると考えられる。

さらに，アメリカの独立後，マアチューセッツの知事となって官邸に現われる Hancock，さえも，彼女に同情的である。アメリカの新しい制度が信じられず，新しい総督が必ず現われると信じていた Esther は，Hancock を総督と誤解する。彼女の落胆ぶりを見て，彼は同情により涙を流す程である。Esther は新しい世代が捨てた，主義，慣習，生活様式を大事にして

13 Hawthorne は *American Notebooks* において，罪を犯すとその結果が身体に現われることを "Lady Eleanore's Mantle" の中で示すと語っている。Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1972), VIII, 222.

14 Lundbald, *op, cit.*, p. 105.

きた。そのような彼女を彼は "a symbol of the past" (301) として，廷臣が女王を扱うように遇する。

以上，検討してきたように，話し手の変化と共に，描き方にも変化がみられる。この描き方の変化から，作者 Hawthorne の考え方が読み取れる。即ち，初めの三つの物語において，Hawthorne は，現在を象徴するアメリカの民主主義を守ろうとした態度あるいは民主主義精神を肯定し，過去を象徴する王領植民地制度，罪により呪われた過去，貴族階級を否定している。ところが，第四の物語において，Hawthorne は，過去に尊敬と同情を示しつつ，訣別している。この描き方の相違に，Hawthorne のあいまいさ，即ち，過去にも，現在にも落ち着くことのできないジレンマが表われていると考えられる。

彼のこのあいまいさは，作品の中の人物の描き方にも表われている。"Edward Randolph's Portrait" において，Lincoln は Hutchinson と対立する人物であるが，次に示すように，イギリス国王に謀反を抱いてはいない。"Trust, sir trust yet awhile to the loyalty of the people," (263) 彼は，ニューイングランドを愛する人物で，人々がイギリス兵と戦うことを避けるために，Hutchinson と対立する。彼は Alice 程，積極的な役割は持たず，完全な民主主義者ではない。

また，"Lady Eleanore's Mantle" において，Eleanore と対する唯一の人物は，Clarke である。しかし，彼は，Eleanore や Helwyse を非難はするが，積極的な行動には出ない人物として描かれている。さらに，"Old Esther Dualey" における Hancock は，過去に対して尊敬と同情を示す人物として描かれている。

このように，Hawthorne は四つの物語において，徹底して各々の時代における過去を否定し，現在を肯定してはいない。あいまいさを残して描いている。このあいまいさが Hawthorne の現在と過去のいずれにも落ち着くことのできないジレンマの表われである。

Ⅳ

Hawthorne の過去と現在とのジレンマを他の作品との比較により検討してみる。"Grand Father's Chair" において，アメリカの初期の歴史が語られる。この中で，暴徒におそわれた王党派の総督 Hutchinson の話を聞いた子供達は，次のように同情している。

> she hoped the neighbors had not let Lieutenant Governor Hutchinson and his family be homeless in the street, but had taken them into their houses, and been kind to them.[15]

15 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1972), VI, 159.

"Edward Randolph's Portrait" において Hawthorne は，過去を象徴する人物，Hutchinson を否定的に描いていたが，ここでは彼に同情を示している。彼はむしろ過激的な暴徒を非難している。この描き方の相違は，作者，Hawthorne の王領植民地制度と民主主義，即ち過去と現在に対するジレンマの表われであると解釈できる。

"My Kinsman, Major Molineux" では，青年 Robin が親戚であり王党派の Molineux 少佐を頼り，ボストンと推測される都会へ田舎から出てくる。ところが Molineux 少佐は民衆のリンチを受け，Robin の想像していた尊敬されるべき少佐は既に過去の人物となっていた。この物語の中では，都会と田舎，Molineux 少佐と Robin の父とが，各々象徴的な意味でイギリスとアメリカ，即ち，過去と現在とを表わしている。Robin は都会に留まることも田舎に帰ることもできず，ジレンマに陥る。彼は，Hawthorne と同様に過去と現在のいずれにも落ち着くことができない。最終的には，Robin は都会を選択するが，田舎への思慕の情を失ったわけではない。

"Earth's Holocaust" において，過去の人類の文明から生まれた物，文書，武器，古典が新しい未来に備えてすべて焼かれる。しかし，人間の心までは焼くことができない。従って，次に示すように，過去と同じことを繰返すと語られている。

> "And, unless they hit upon some method of purifying that foul cavern, forth from it will re-issue all the shapes of wrong and misery—the same old shapes, or worse ones—which they have taken such a vast deal of trouble to consume to ashes.[16]

"Old Esther Dudley" において，Hancock は過去と潔く訣別していたが，ここでは，過去との断絶が困難であることが示されている。

ところが，*The House of the Seven Gables* において，Holgrave は，建物はそれが象徴する制度を見なおし，改革するために20年に一度は壊されなければならないと，次のように語る。

> I doubt whether even our public edifices—our capitols, state-houses, court-houses, city-halls, and churches—ought to be built of such permanent materials as stone or brick. It were better that they should crumble to ruin, once in twenty years, or thereabouts, as a hint to the people to examine into and reform the institutions which they symbolize.[17]

---

16 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1974), X, 403.

17 Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, II, 184.

Holgrave は過去の制度の改革の必要性を認めているのである。

このように Hawthorne は他の作品においても，過去と現在のどちらか一方を否定したり，肯定したりしていない。Hawthorne の過去と現在との間のジレンマは，彼の先祖の過去と19世紀アメリカ社会との関わりと無縁ではないと考えられる。

次にこの点について考察する。Hawthorne の先祖 William Hathorne[18] 少佐は，1630年マサチューセッツ州に移民してきた。彼は植民地開拓のために活躍した熱心なピューリタンであったが，クエイカー教徒を迫害し，ニューイングランド史にその名を残した。二代目の John Hathorne は，魔女裁判における判事として汚名を残した。これらの先祖の過去を Hawthorne は汚点としてとらえ，罪悪感を感じていた。こういったことが Hawthorne の過去の否定と関連がある，と考えられる。

ところで，アメリカでは1828年に Andrew Iackson が大統領に就任し，いわゆち "Jacksonian democracy" の時代に入る。Hawthorne は私生活において，民主党員で，Henry James によると熱烈な党員であった。[19] このことが，Hawthorne の19世紀アメリカ社会の肯定の一因となっている。しかし，それが過去の貴族制度，即ち，過去の否定の一因となっていると考えられる。一方，産業革命も 1830 年頃から始まり，1837 年には最初の鉄道が敷設された。しかし，Hawthorne は機械文明に関して，あまり良い印象は持っていなかったと考えられる。蒸気機関車に関する記述が，*The American Notebooks* にあるが，彼は悪感情を抱いていた。

> A steam engine in a factory to be supposed to possess a malignant spirit; it catches one man's arm, and pulls it off; seizes another by the coat-tails, and almost grapples him bodily;—catches a girl by the hair, and scalps her;—and finally draws a man, ane crushes him to death.[20]

さらに，当時の実利社会は，文学を志す者にとって好ましくない環境であった。これらのことが，Hawthorne が19世紀のアメリカ社会，即ち，現在を否定する一因となっていると考えられる。

また，文学界においては，Ralph Waldo Emerson が，1837 年に行った講演 *The American Scholar* で，アメリカの文学的独立を示したように，ヨーロッパ，特にイギリスに追従することなく，アメリカ独自の文学をめざす気運が高まった。しかし，Hawthorne はイギリ

---

18 Nathaniel が Hathorne の名に "w" を入れて，Hawthorne とした。

19 Henry James, *Hawthorne* (AMS Press, 1968), p.71.

20 Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, VIII, 101.

スと比較して，ニューイングランドの土壌は貧弱である，と常に感じていた。彼はこのことについて *The Marble Faun*[21] や *The Brithdale Romance*[22] の序文において述べている。彼は歴史に興味があり，過去に関心を寄せていたにもかかわらず，アメリカには文学の素材となる伝統，過去が存在しなかった。19世紀のアメリカには芸術家 Hawthorne に取って必要な文学的素材がこのように欠けていたことは，Hawthorne が現在のアメリカを否定し，旧世界のヨーロッパを肯定する原因の一つとなっていると考えられる。

V

"Legends of the Province House" をまとまったシリーズとして読むことにより，Hawthorne の過去と現在のいずれにも落ち着くことのできないジレンマが浮きぼりにされてきた。彼の19世紀のアメリカ社会に対する肯定と否定の二重の態度と，彼の祖先の過去とが，その原因であると考えられる。Hawthorne のこの過去と現在との間のジレンマが，"Legends of the Province House" の主要テーマとなり，それ以降の "My Kinsman, Major Molineux", *The House of the Seven Gables* 等の作品における主要テーマとなっていると考えられる。

参 考 文 献

Allen, Margaret V. "Imagination and History in Hawthorne's 'Legends of the Province House'," *American Literature*, IV (November, 1971). 432-437.

Baym, Nina. *The Shape of Hawthorne's Career*. Cornell University Press, 1976.

Becker, John E. *Hawthorne's Historical Allegory: An Examination of the American Conscience*. Kennikat Press, 1971.

Bell, Michael Davitt. *Hawthorne and the Historical Romance of New England*. Princeton University Press, 1971.

Dauber, Kenneth. *Rediscovering Hawthorne*. Princeton University Press, 1977.

Eliot, T.S. "Henry James," *The Shock of Recognition* edited by Edmund Wilson. Vol. II. Octagon Books, 1977.

Fossum, Robert H. *Hawthorne's Inviolable Circle*. Evertt/Edwards, inc., 1973.

_____. "Time and Artist in 'Legends of the Province House'" *Nineteenth-Century Fiction*, XXI (March, 1967), 337-348.

James, Henry. *Hawthorne*, AMS Press, 1968.

Lundbald, Jane. *Nathaniel Hawthorne and European Literary Tradition*. Russell & Russell, inc., 1965.

Newman, Lea Bertani Vozar. *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*. G.K. Hall & Co., 1979.

Smith, Julian. "Hawthorne's *Legends of the Province House*," *Nineteenth-Century Fiction*, XXIV (June, 1969), 31-44.

21 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1974), IV, 3.

22 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1971), III, 2.